

記事紹介

二面
私の発言「無謀な国会」と70年闘争
工学体系の告発と劇
演「東京共闘会議」
の方向

三画
図書月報がバリエーションに決起日共が
先頭に労働者切りの
闘争からの通信「新
しい反逆の季節」

四画
前進する人民戦争
タイ愛国戦線の闘争
報告

新左翼

1969年
8月5日
第36号

月3回5、15、25日発行
1部 15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円(共)

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2-10 トミヤビル
電話(371) 5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

アポロが飛んで首がとぶ 八名解雇 連日ストライキで抗議



三浦池 宮浦 不当処分反対の闘争激化

三井鉱山は昭和三十八年には一
万二千人、日産六千トンであったの
が、いまは労働者を七千七百人
に減らし、逆に日産は日産一
万二千トンに増え、増産につれて
いる。三井鉱山以前は三十四年
に死に傷者一名という安全実
績をあげたが、一四九
二名の指名解雇と第一組合がで
きた三十八年以後、毎年十数名の死
亡者を出し、三十八年には三井
の大爆発によって四百五十八名の
死に傷者八百名の死者を出し
た。三井は三十八年四月に抗
内火災で、七名の死者を出し、三
百名の死者を出した。今年の一
月四日以降は第四回合理化運
動で、災害の多発をきたした。
今年一月から三井は、
毎月百名が「生命があるうちに」
と退職し、一月から四月までに六
名(宮浦二名、三浦二名、港
務二名)が災害によって死に
た。

このような「地獄の地獄」に対
して、三井労働者は職場で会社の
保安対策を追究し、文字通り「自
分の生命を守る」ために闘いに立
上ったのは当然だった。この保安
闘争の中心になって闘ってきた井
上、江上両氏は会社は「機込み」
返事をしない」といふ、いかに
つ、次のように闘っている。

「三井労働者が日本の帝国
主義的支配の強化、労働運動主流
の体制内化の中で、孤立し、反
れ、敵をうち倒して、行動と力
と団結を破壊されようとしている
ことを代表して、いさつし、福岡
の万国博覧会(ハンパク)の
闘争が激化された。(写真)

五月二十八日解雇し、六月九日に
は両氏を会社は警察に突きだし、
逮捕させた。このしらせをきいた
組合員は、社長と副社長に対して抗
議のため面会を求めたが、彼らが
姿を消したため、彼らが組合員の
前に姿をあらわすまで、社長室に
座り込んだ。これに対して六月十
七日、千名にのぼる機動隊に組合
員を襲撃させ、なぐるけるの暴行
を加え、二十一名を会社警備隊の指
示の下に逮捕させた。検察庁は二
十一名のなかから十名を起訴する
とともに、二十二日八名の解雇を
する一方、機動隊で真に帝国主義支
配と対決する質をもった労働運動
を擁護するために活動した。

三井の社会同盟員に対するレ
ッドパージはこのような状況のな
かで発生したのであって、全国の
反戦労働者に対する攻撃とまっ
たく同質のものとして発生したの
である。

さらに三井労働者の他の支部が労
資協働・生産性向上運動である
D運動を条件付きに受け入れた
なかから、これを拒否する宮
浦支部に対して、三井鉱山は二万
人への復讐は自分の首を賭けな
ければならぬと、全国の
反戦労働者に対する攻撃とまっ
たく同質のものとして発生したの
である。

本格的に復活した日本帝国主義
は、安保体制の下で核武装、アジ
ア侵略の体制を作るために、軍需
産業を飛躍的に拡大しようとし
ているだけなく、すべての工場、
運輸、通信等の職場をファッシ
オ支配の下におき、死の労働者
することのできる体制をつくら
うとしている。三井労働者の今
の闘争は、七十年安保体制を支え
る職場を作ろうとする独占資本と
官憲の一体となった攻撃にかな
らない。いま全国の労働者は
安保紛争を下からの実力闘争
で闘おうと準備しているとき、
三井の弾圧は、この闘争に対する
敵の先制攻撃にほかならない。こ
れが弾圧の第一の狙いである。

全国のほとんどの職場でこのよ
うな支配体制がすでにしられてい
るなかから、三井労働者の
闘争は全国の労働者階級にききか
けて断固に立上っている。こ
の闘いが三井の他の職場に、他の
山にそして鉄鋼に、電力に、造船
に、機械に波及するのを恐れた独
占官憲は一体となって、労働協
定、法規、裁判判決などを一切無
視し、自虐的な攻撃をかけている
労働者の闘争の発展が極めて
不均等であり、長期かつ困難な闘
いであることはきかれないが、
敵階級の企図が必ず失敗すること
は明らかである。

たとえ九州の地底で働こうと
も、三井の労働者は、民間を
のりこえ日共の要請を排除して
日本帝国主義と真に対決し、七十
年安保紛争のために闘おうとす
るすべての労働者、学生、市民と
緊く結びついている。

ハンパク開く 7日 森の宮公園

「反戦のた
めの方園博覧
(ハンパク)
は、大阪森の
宮公園で七日
午前十一時か
ら始まった
として登場する、人民の創造する
「開会式」を
もって幕が切
と強調した。この発言のなかで小
田実氏が、今日を出発点として南
ベトナム臨時革命政府を承認する
運動をおこす。これに賛成の方は
パネルに署名してほしい。日本全
国であつた署名をもつて革命
政府代表に日本人民の意志をつた
えたい」と訴える。直ちに沢山
の人たちが会場を埋めた。



心理戦との闘い

アメリカ・タンム一派は、彼らの反動的な支配権を維持するために武力を用いて人民を抑圧しながら、地方では旧来の反動的なイデオロギ―を維持するためにいわゆる「心理戦」なるものを展開してきた。アメリカ・タンム一派の「心理戦」は、タイでは、農村地域の「発展」という看板の下に行なわれている。

通信網の拡張―たとえば、村民を統制し抑圧するために、通信網を増設する。

「地域開発」―いわゆる「開発村」と呼ばれるものを増設することには、事実上、全土の主要地区に軍事基地を設置するための準備である。そういう村は普通、軍隊・警察・国土防衛隊「スパイ」などによって支配されることになる。武力闘争の活発な地域では、いわゆる「開発村」といわれる村が、事実上「戦略村」とか「基地地帯」と化している。この状況の下では、村民は夜になると自由に出歩くことも許されず、彼らの行動も毎日の生活必需品も、強制的に統制されている。一九六七年には、北西部地方でもさういって村が十以上もあったのである。他の地方では状況が異なる。地方には「山岳民族開発センター」が設置され、アメリカの「専門家」と国境警備隊の直接支配の下に置かれている。その上さらに多数の部隊が駐屯している。

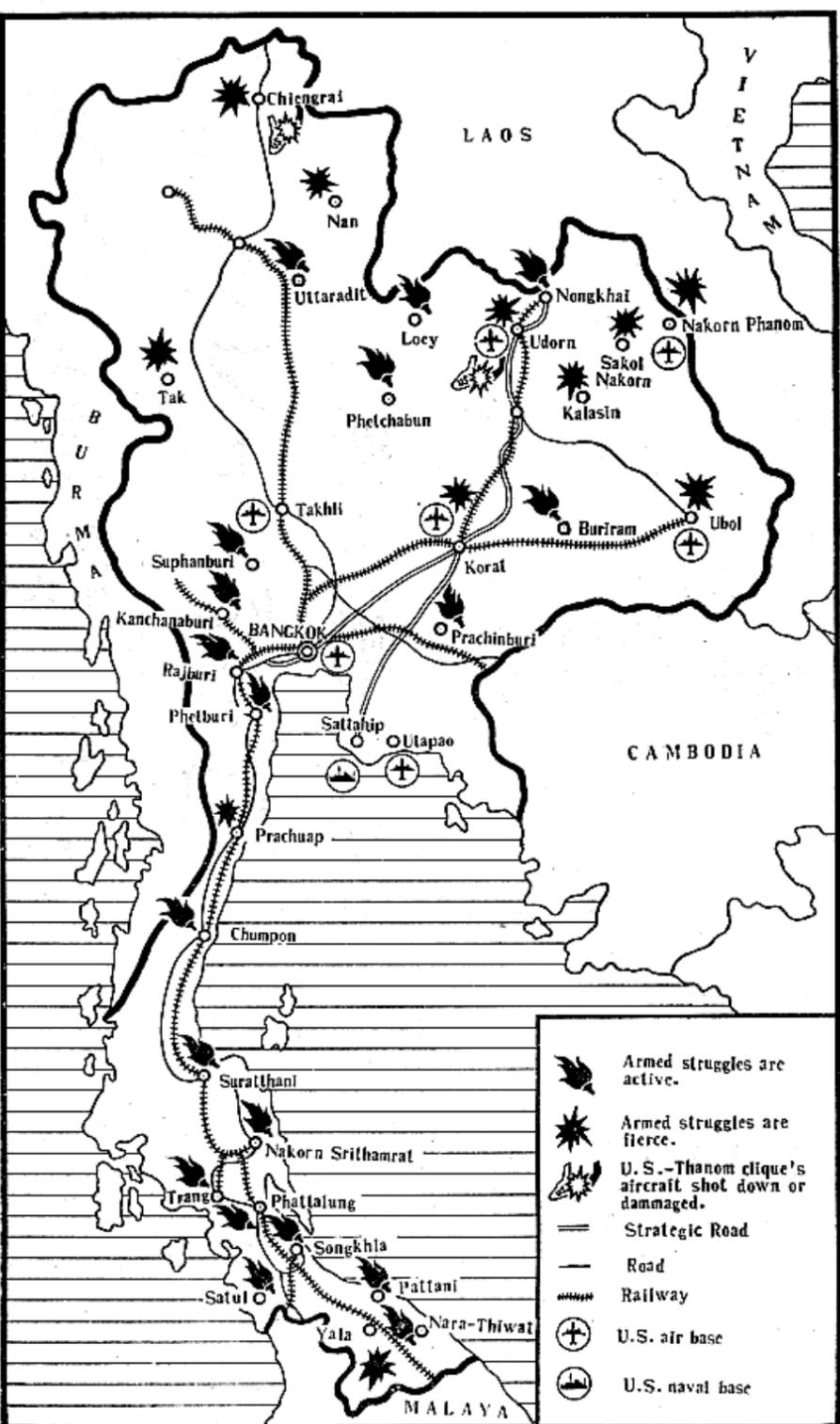
「移動健康衛生チーム」、「マラリア撲滅移動チーム」、及び俗にいう「伝道団」―反動的な宗教の活動のための移動健康チームといふものがある。これらすべての移動チームは、反動的な情宣活動を行って、民衆の心を麻痺させ、武力闘争への意欲をくじき、階級闘争を断念せしめ、一方、村民の隠れた活動を探り出すためのスパイ制度を敷いているのである。しかし、アメリカ・タンム一派の「心理戦」は成功しなかった。タイの愛国的な革命家は、毛沢東主義の次のような教義を学び、応用したのである。「政治的権力を打倒するために、まず第一に公衆によっても支持される意見を創ってイデオロギ―の分野に働きかけることが必要である。これは革命的階級の側にも、反革命的階級の側にも同様に真実である。」

タイの革命家たちは、敵の「心理戦」の企みをあばくために、あらゆる種類の宣伝手段を用いたと同時に、彼らは新しく且つ革命的なイデオロギ―を普及させ育てた。こうした活動は次のように概略される。

―革命側のラジオ放送「タイ人民の声」は六年以上もわたって、アメリカ帝国主義者現代の修正主義者及びタンム・プラハ反動勢力の、犯罪的な行為をあばくことに、積極的に取り組んできた。

―地下新聞、印刷物、革命的な詩や歌などを発行し、ゲリラ地区や敵の占領地区で、民族的な性格をもった種々の革命劇や公演を行っていた。

―村々を包圍し、武装宣伝を指導する。



武装闘争

人民武装隊は三千人の国境警備隊員からなる巡視隊を、マエソドのチョンカブ村に近い谷で待ち伏せた。この戦いで二人の国境警備隊員が死に、他九人が負傷した。戦いは翌日まで続いたが、敵はなお包圍を破ることができず、救出のために援軍を求めたのである。

この地区での戦いは一九六七年十二月三十一日まで続いた。

一九六八年一月一日午後一時、人民武装隊はマエソドのマエマオ村で、任務についていた国境警備隊員を襲い、警備隊員を殺し、他の三人を負傷させた。

一月十日、人民武装隊は再び国境警備隊と特殊落下部隊を襲い、パワイ部族を破る重傷に包圍した。敵は外からの救助を求めたが、多数の敵の部隊が全滅した。

マエソドの人民武装隊はまた、食料や軍事物資を運ぶヘリコプターを襲撃し、反動軍のために投下される食料を奪った。

一月、マエソドの人民武装隊は激しい戦いを続行した。たとえば、二月六日、ファイブイグッド谷で警備隊のヘリコプターを襲撃して二人を負傷させた。さらに二つの駐屯地に放火し、弾薬庫を燃やした。マエソドを襲った。

前進する人民戦争

タイ愛国戦線の闘争報告

その弾薬庫は地方行政官と陸軍大佐と警察署長によって形成されており、そのころ山地地形調査が行なわれていたマエソドのヌキ部族に同調して行なわれていた。その時以来、彼らは決してそこへ行こうとしないのである。

六七年の三月から七月まで、人民武装隊は、間断なく敵を襲撃し、ゲリラ活動を七つの地区にまで拡張し、それらの各地区を結び合わせて広大な戦場とした。そして同時に、活動の地域は平地へと広範囲に広がっていった。

人民武装隊がこの時期に行なった戦いの特質は彼らが常に主権を握っていたというところである。彼らは村にある敵の駐屯地や野営地を襲撃し、山岳地帯の森林の中にある戦略上の拠点を襲い、あちこちで敵の部隊を待ち伏せした。そして時には山から平地へ降りていって敵の輸送トラックを待ち伏せしたりもしたのである。

六月の末になると、タイの北部に雨期がおとすれる。そして七月には、雨量が非常に多くなる。この自然現象が敵の活動を制限され、戦闘は、たいていの場合、縮小された。しかし、人民武装隊は、敵の重要な駐屯地を攻撃するにどのような機会も逃がさなかった。

この時期の主な戦いは次のようなものである。

一九六八年四月十四日、人民武装隊は、ナン・プワエ山の近くにある敵の基地とヘリコプターの着地点を襲った。そこは以前は敵北の地であった。武装隊は降下中のヘリコプターを襲

撃し、着陸地点を、おおよそ一小隊の敵兵をほとんど全滅させた。

翌朝、武装隊は再び同じ場所を包圍した。多数の敵兵がそこで死に、残った兵は走って戦線の中に隠れた。そして結局彼らは、その基地とヘリコプターの着地点を見捨てざるを得ずあわてふためて退去したのである。しかし途中で再び、武装隊におさえられた。彼らは救助の援軍を呼ぼうとしなかった。幸運にも生きながらえた兵士は、命がけで大きな急ぎでナン川を渡っていた。この戦いで人民武装隊は二十人の敵兵を殺し、たくさんの軍事用品を捕獲し、そして彼らの側には、損失がなかったのである。

一九六八年四月十七日の早朝四時四十五分、人民武装隊は警備隊員が七人いた敵の駐屯地を襲った。チェンゴング地区にあるファイブイグッド谷の「山岳民族再定着センター」の附近のことであった。八時三十分、武装隊は敵に対して宣戦攻撃を行なった。敵に向かっって叫び、彼らに降伏するよう命令した。三人の敵兵が基地から逃げ出し、彼らのうち一人が負傷した。三時三十分、武装隊は基地に火をつけ、それが兵器庫に燃え移り、三分で爆発した。敵の無線機は火のために破壊してしまっった。人民武装隊はそれから戦線の中へ入っていき、素手で敵と闘い、残った十四人を全滅させた。戦いは四時半まで続いた。それから武装隊は無事に帰った。戦利品には、B40ロケット、機関銃一、ライフル五、カービン銃五、手榴弾数個、他におびただしい数の軍用品があった。

一九六八年五月三日、武装隊はプワエ山を進行中の敵を襲った。彼らは地雷に近づいてしまひ、そのうえ人民武装隊に包圍されてしまった。彼らは一歩も動けず、援軍のやってくる五月六日まで包圍されたままであった。しかし、その援軍もまた武装隊におさえられ、死体をいくつか残したまま退却しなければならなかった。しかし退却の途中、再び彼らは地雷に近づいたのである。この闘争で、人民武装隊は、敵を三千人以上に死にさせ、非常に多くの戦利品を得た。

米空軍基地を襲撃

敵密な統計ではないが、一九六七年八月から一九六八年七月まで、人民武装隊は、四つの地方で、六百四回敵と交戦、衝突し、九人のアメリカ兵を殺し、千五百六十人の敵兵を捕獲し、様々な型の航空機を十機破壊し、たくさんの軍事用伝送機を破壊した。

さらに人民武装隊は、民衆の中に入って宣伝活動を行ない、この期間に百回以上も民衆を動員した。

前の二年間の戦いの分も加えると、人民武装隊の敵との交戦・衝突の回数は、千四百回のほり、アメリカ兵十四人を殺し、千四百人の敵兵を捕獲したことになる。

タイ共産党の指導の下に、愛国的かつ革命的なタイの人民は、「すべての反動勢力は、張子の虎である」という教義を学び応用した。一九六八年七月二十一日、サナムのアメリカ訪問の

おおよそ一月後、アメリカ帝国主義とタイの市民によるデモ行進が行なわれた。彼らは次のような十一の要求をかかげた。ベトナムから援軍が撤退せよ、雇用兵を国外へ送るのを止めよ。それは国家の権威に傷をつけるものである。アメリカ兵がタイで、休息とレクリエーションの時を過ごすことを許した契約を廃棄せよ。外国がタイを科学調査の実験台にするのを阻止せよ。等々

それから一月後の一九六八年七月二十六日の夜、もっと劇的なことが起こった。北西部の人民武装隊が、アメリカのワトルン空軍基地を襲撃したのである。

一九六八年七月二十六日午後三時三十分、民衆と一体になり民衆から完全な支持を受けているワトルン地方の人民武装隊は、アメリカ・タンム一派が張った防衛線を突破して空港の中に入った。当然のことながら、良く準備を整えていた武装隊は、アメリカの飛行機二機と、C141輸送機二機と輸送機一機及び、F4戦闘機二機を破壊した。

その夜、人民武装隊は更に一度空港を襲撃しそれは翌朝の四時三十分まで続いた。彼らは空港の発電所や兵器庫、燃料庫などを襲った。敵が火を消そうとしてヘリコプターを出したら、そのヘリコプターも武装隊に襲撃された。この襲撃で人民武装隊はタイの自衛隊一名を殺し、アメリカ兵四人を負傷させた。更に多数のアメリカ兵が死傷した。

アメリカ軍のワトルン基地へのこの襲撃は、アメリカ・タンム一派を驚かせ、彼らに不安に陥れさせた。彼らはたまたま、緊急会議を開き、アメリカ軍のワトルン空軍基地および他のアメリカ軍基地防衛のために、どのような策が必要かを協議した。

西側のある新聞通信社は驚いて次のように報道した。「タイゲリラによるアメリカのワトルン空軍基地攻撃は、アメリカの空軍に対して急速に高まりつつある反動運動の最初の一撃である。更に続けて「基地への攻撃―それまでタイにおける基地は、平時のごとく安全」とみられていた―は、タイが予想されたより早く第一のベトナムになるかどうかが問題提起されている」

米空軍ワトルン基地を人民武装隊が攻撃したことによって、タイに駐在するアメリカ兵にとって安全な地帯は、もはやないということが明らかになったといえる。彼らがタイにしがみついている限り、人民武装隊は彼らを襲撃し、彼らをすっぱり一掃してしまおうとするだろう。

過去三年間における武装闘争およびタイの広範な層に渡る愛国的且つ革命的民衆によって行われてきた種々の闘争は、アメリカ帝国主義とその追従者たちに、彼らの征服の時代がもう長くは続かないのだというを示した。

(タイ愛国戦線海外代表部発行の「タイ人民戦争の勝利―三周年報告」からの抜粋である)

職 業 報 告